

# ピア・サポートの社会学に向けて

富山大学 伊藤智樹

## 1 目的

この報告の目的は、病いや問題を抱える人同士の支え合い（ピア・サポート）に社会学がアプローチするための枠組みを論じることである。具体的には、セルフヘルプ・グループ研究の蓄積を十分に吟味しつつ、ナラティブ・アプローチの特性を活かした研究を標榜する。

## 2 ピア・サポート研究の動向

さまざまな病いに関して、ピア・サポートに期待する社会的気運が高まっている。特に、糖尿病患者の自己管理、乳がん患者の心理・社会的なサポート、精神疾患をもつ人の地域（＝施設外）での生活などについては、既にピア・サポートをテーマとする先行研究が蓄積されている。

しかし、それらの先行研究については、第一に、生理的・心理的指標に基づく効果測定に偏りがちであり、第二に、ピア・サポートの（対個人的）機能に関する説明不足という問題点もある。つまり、そこでは、ピア・サポートが個々の病い・問題を抱える人にとってどのような意味で役に立つのか、そしてそのことが社会的にどのようにとらえられるのか、といったことがほとんど考察されないまま、効果を測定して裏づけようとしている。また、実践的な取り組みのレベルでは、心理学的カウンセリングや障害者運動からの応用によって、手探りで推進されている。

このような事態に鑑みて、社会学からのアプローチが今後重要性を増すだろうと報告者は考えている。

## 3 ピア・サポートの社会学に向けて

そこで、この報告では、セルフヘルプ・グループ研究の蓄積を十分に活かすため、ナラティブ・アプローチを導入する（伊藤 2009）。セルフヘルプ・グループはピア・サポートが生起する重要な場となる（ただし、ピア・サポートはセルフヘルプ・グループそのものではなく、個人同士のやりとりなども含む）。そこで、従来のセルフヘルプ・グループ研究の蓄積の中から特に「共同体の物語」（J. Rappaport）に着目し、その有効性と限界について指摘する。

## 4 結論

病いのピア・サポートへの関心は近年高まっており、社会学の特徴を活かした対応と関与が望まれる。そのためには、先行するセルフヘルプ・グループ研究の知見を十分にふまえ、ピア・サポートの作動過程そのものに関して掘り下げる研究をすべきである。その際、ナラティブ・アプローチが分析枠組みとして有効である。「共同体の物語」は分析枠組みとして利点がある。ただし弊害にも注意が必要である。

## 文献

伊藤智樹, 2009, 『セルフヘルプ・グループの自己物語論——アルコールリズムと死別体験を例に』ハーベスト社.